

# 大学生のスポーツ活動の「継続」と 「離脱」に関する考察

勝 健 真

本研究の目的は、大学生のこれまでのスポーツ経験やスポーツ活動に対する動機に着目し、スポーツ活動の「継続」と「離脱」の原因を明らかにすることである。結果として、まずスポーツ実施率が高い年代は、小学校高学年と中学校が最も高い割合を示し、全般的に球技系種目の実施率が高いということが明らかとなった。スポーツ活動に対する動機について、スポーツを始めるきっかけは、「自分の意思で決めた」と回答した人が最も多かった。スポーツの継続状況について、スポーツを継続している人は、51.1%であり、途中でやめてしまった人は48.8%であった。スポーツ活動継続の原因については、「そのスポーツをすること自体が楽しい」と回答した人が最も多く(58.8%)、内発的に動機づけられてスポーツ活動に取り組むことが、スポーツ継続と密接に関連していると推測できる。スポーツ活動離脱の原因について、「その他」が最も高い割合(46%)を示した。「その他」に含まれる原因としては、「学業とスポーツの両立の難しさ」、「バーンアウト」、「新しいことへの挑戦」などが推測され、これらの要因が大学生のスポーツ活動からの離脱に、影響を及ぼすということが考えられる。

## 【緒言】

近年、国民のスポーツ実施率は徐々に上昇しているが、この上昇については中高年を中心とした健康を志向する運動・スポーツの実施によるところが大きい。内閣府は『体力・スポーツに関する世論調査』の中で、週1回以上運動・スポーツを行う成人の割合は45.3%と概ね2人に1人、週3回以上は23.5%と概ね4人に1人、世代別に見ると、週1回以上、週3回以上ともに20歳代30歳代が、他の世代と比べて実施率は低くなっている。また、文部科学省が行っている『体力・運動能力調査』では、子供の体力・運動能力の結果を、その親の世代である30年前と比較すると、ほとんどのテスト項目において、子供の世代が親の世代を下回っている。一方、身長・体重など子供の体格についても同様に比較すると、逆に親の世代を上回っている。このように、体格が向上しているにもかかわらず、体力・運動能力が低下していることは、身体能

力の低下が深刻な状況であるといえる。子供の体力の低下は、将来的に国民全体の体力低下につながり、生活習慣病の増加やストレスに対する抵抗力の低下などを引き起こすことが懸念され、社会全体の活力が失われるという事態に発展する可能性がある。そのため、子供の体力向上を図るために、継続的に子供の遊びやスポーツを取り巻く環境を整えていく必要がある。さらに生涯スポーツの観点からすると、青年期・成人期にある人々の継続的なスポーツ実施を実現するための方策も必要であるといえる。

文部科学省は、スポーツ基本法に基づいて平成24年3月30日にスポーツ基本法を公布し、「スポーツを通じてすべての人々が幸福で豊かな生活を営むことができる社会」を目指すことを大きな目標として掲げた。さらに同基本計画、第3章に「今後5年間に総合的かつ計画的に取り組むべき施策」の中の「若者のスポーツ参加機会の拡充や高齢者の体力づくり支援等のライフステージに応じたスポーツの推進」という項目において、「成人の週1回以上のスポーツ実施率が3人に2人(65%程度)、週3回以上のスポーツ実施率が3人に1人(30%程度)となることを目標とする。」「成人のスポーツ未実施者(1年間に一度もスポーツをしない者)の数がゼロに近づくことを目標とする。」ということ掲げている。しかしながら、平成28年に行われた『スポーツの状況調査等に関する世論調査』においては、週1回以上スポーツ活動を行っている者の割合が、平成24年では成人全体の47.5%から平成27年では40.4%と7.1ポイント減少しており、平成28年度では42.5%と若干上昇したが、スポーツ未実施者の割合は32.9%、さらに1年に1回もスポーツをしておらず、今後もするつもりがない者の割合が27.2%という数字であった。また年代別に見ると、20～40代が低く、特に女性が低くなっている(週1回以上28.2%)。

さらに10代の運動・スポーツの実施頻度について、2015年にSSF 笹川スポーツ財団が行った『10代のスポーツライフに関する調査』において非実施者が全体の13.2%と7～8人に1人の割合で運動・スポーツを行っておらず、週1回未満、週1回以上2回未満の実施割合もそれぞれ11.5%、6.6%で、最も運動できるはずのこの時期に、非実施者の割合が3割を占めていることは大きな問題であるといえるだろう。この中学校期、高等学校期、大学期と加齢とともに実施率が徐々に減少している現状は、スポーツ基本計画の意にそぐわない状況を生み出しているものといえる。小学校期、中学校期に続く高等学校期や大学期は、スポーツに対する意向や生涯スポーツに対する

態度が確立される時期であり、その後続く成人期のスポーツ実施を左右する重要な時期である。特に大学期は社会人となり、自活する前段階の時期であり、その後の生活にとって重要な意味をもつ。大学生のスポーツに関しては、高等学校までの厳しい運動部での活動によってバーンアウトを起こして大学では運動部に加入しない、あるいはスポーツをするにしても同好会などの比較的緩やかな環境で行うなどの傾向がみられる。生涯にわたるスポーツ実施という観点からすると、高等学校から大学への進学に伴い、定期的なスポーツ実施者が減少することは大きな問題であるだろう。

そこで本研究では、大学生のこれまでのスポーツ経験、スポーツ活動に対する動機に着目し、スポーツ活動の「継続」と「離脱」の理由について、調査検討を行うことを目的とする。

## 【方法】

### 1. 調査対象

大阪経済法科大学の在学生及び近隣の他大学の学生267名で、運動経験のある学生やない学生など、様々な学生を対象とした。

### 2. 調査期間

2016年10月3日～12月5日

### 3. 調査内容

本研究では質問紙調査を用いた。本質問紙は原則的に無記名で行われた。また、各調査対象者のプライバシーが漏洩することは一切ないことが、ここでは改めて記載されている。質問紙の作成にあたっては、藤原・堺(2010)、松井(1993)を参考に作成を行った。

## 【結果と考察】

結果と考察は、以下、質問項目の配列にしたがって行う。

### 1. 幼少期(小学生まで)の頃の遊びについて

表1は、幼少期(小学生)の頃の遊びについて、どのようにして遊んでいたか

を示したものである。結果は、「外でよく遊んでいた」と答えた学生が全体の62.9%、「屋内で静かに遊んでいた」と答えた学生は約22.4%であった。

小島ら(2004)は、幼少期の遊びについて、約60%の学生が幼少期は活発に遊ぶほうだったという報告している。さらに、「屋内より外遊びに夢中だった」という設問に対しても、60%以上の学生が幼少期には屋内の遊びより外遊びに夢中になっていた報告をしており、本研究結果とほぼ同様の結果となった。

表1 幼少期の遊び

単位：名

外でよく遊んでいた	168 (62.9)
屋内で静かに遊んでいた	60 (22.4)
覚えていない	39 (14.6)

注) ( )内は比率(%)を表す。

## 2. 幼少期(小学生まで)の頃の遊び場について

表2は、幼少期(小学生まで)の頃に、遊び場やスポーツ施設の有無を示したものである。結果は、「多かった」と答えた学生は34%、「少しあった」と答えた学生は43%であり、約77%の学生が幼少期に何らかの遊び場があったということであった。

この結果においても、小島ら(2004)の調査では、約80%の学生が幼少期に屋外に遊び場があったと答えており、同様の結果となった。この結果から、本研究においても、幼少期に遊び場に恵まれていたということが推測できる。

表2 幼少期の頃の遊び場

単位：名

遊び場やスポーツ施設が多かった	65 (34.2)
遊び場やスポーツ施設が少しあった	82 (43.1)
遊び場やスポーツ施設があまりなかった	32 (16.8)
遊び場やスポーツ施設が全くなかった	11 (5.7)

注) ( )内は比率(%)を表す。

## 3. これまでのスポーツ経験について

表3は、幼稚園から高校までのスポーツ経験について、6つのカテゴリーに分けてそれぞれの年代で、どのようなスポーツ種目を行っていたかを聞いたものである。年代毎にスポーツの取り組み状況を見てみると、幼稚園の頃までに何らかのスポーツを行っていった割合は約28%であり、小学校低学年になると約42%、小学校高学年と中

学校で約49%とピークを迎え、高校では43%であった。また年代によって取り組むスポーツ種目に違いがあり、幼稚園、小学校低学年までの頃では、水泳、サッカーが多く、小学校高学年、中学校になると、サッカー、野球、バスケットボールが多くなり、高校になると、さらに細分化されていることがわかる。

以上の結果を踏まえ、小学校高学年から高校においては、特に球技系種目の実施率が高いということが明らかとなった。この要因としては、学校の体育の授業で実施されることが多く、さらに体育授業以外のスポーツ大会や休み時間でも手軽に行えるスポーツ活動であるということがこのような結果として現れたものと推測できる。

次にスポーツ取組状況について、公益財団法人全国大学体育連合の「大学生のスポーツ経験と意識に関する調査」によると、小学校時のスポーツ取組状況は約73%、中学校時は約79%、高校時は約65%という結果であった。この全国調査と比較すると、本研究の調査対象者は、スポーツ経験が乏しく、運動・スポーツに取り組む意識が低いということが推測できる。過去の運動・スポーツ経験が乏しいと運動やスポーツに

表3 これまでのスポーツ経験

単位：名

	幼稚園まで (0歳～6歳)	小学校低学年 (7歳～9歳)	小学校高学年 (10歳～12歳)	中学校	高校
水泳	27	27	17	7	4
サッカー	21	30	23	23	15
野球	10	16	29	25	18
バレーボール	5	9	9	17	14
柔道	3	2	4	4	3
卓球	2	4	10	16	15
バドミントン	2	3	0	2	3
テニス	1	7	9	11	16
バスケットボール	1	9	23	24	23
ゴルフ	1	1	0	0	0
ラグビー	1	0	1	1	3
格闘技	1	2	1	0	0
剣道	0	3	4	2	2
経験なし	192	154	137	135	151

注) ( )内は比率(%)を表す。

どのように取り組むのかということがわからず、年齢を重ねていくに連れてスポーツから遠ざかってしまう。スポーツや運動を生涯にわたって実施することは、健康の維持・増進につながるため、スポーツや運動に対する意識が低い学生に、スポーツや運動をしてみたいと思わせるような仕掛け作りが重要であると考える。

#### 4. 最も熱心に取り組んだスポーツについて

表4は、これまでのスポーツ経験の中で最も熱心に取り組んだスポーツについて示している。表5は、そのスポーツを行っていた活動場所を示している。最も多かったスポーツ種目は、バスケットボールであり、次に野球、サッカーと続いている。平成29年度の(公財)全国高等学校体育連盟の加盟・登録調査では、男子では1位がサッカー、2位がバスケットボールで以下、陸上、テニス、バドミントンの順となっている。また平成29年度の(公財)日本中学校体育連盟の加盟調査数の調査では、男子の1位がサッカー、2位が野球で以下、バスケットボール、テニス、卓球となっており、球技系種目の所属率が高い結果となっている。さらに、スポーツを行った活動場所においても、約66%が学校の運動部活動であるという結果が示された。

以上の結果から、球技系種目が上位を占めている要因を推測すると、学校の体育授業で実施される運動種目が、球技系種目が多いということ。また、体育授業以外のス

表4 最も熱心に取り組んだスポーツ  
単位：名

バスケットボール	29 (17.7)
野球	23 (14.1)
サッカー	23 (14.1)
卓球	18 (11.0)
バレーボール	16 (9.8)
テニス	12 (7.3)
水泳	6 (3.6)
柔道	4 (2.4)
ラグビー	3 (1.8)
柔道	2 (1.2)
格闘技	1 (0.6)

注) ( )内は比率(%)を表す。

ポーツ大会や休み時間でも手軽にできるスポーツ活動であること。さらに、球技系種目の多くが、仲間とのコミュニケーションや交流を深める上で有効に働くことなど、球技系種目との関わりや実施可能な環境がこのような結果として現れたものと考えることができる。

表5 スポーツの活動場所

単位：名

学校の部活動	124 (66.6)
地域のスポーツクラブ	45 (24.1)
その他	17 (9.1)

注) ( )内は比率(%)を表す。

## 5. スポーツを始めるきっかけについて

表6は、スポーツを始めるきっかけについて示している。最も多かった回答が、「自分の意思で決めた」が44.7%であり、続いて「友達がやっていた」(27.9%)、「親に勧められた」(17.4%)となった。

藤原ら(2010)のスポーツクラブに加入したきっかけに関する調査では、「自分がやりたかった」と回答した人が最も多く、男子は72.1%、女子は71.4%であった。続いて「友達にさそわれた」が男子で18.1%、女子は17.5%、「親・先生・先輩にすすめられた」が男子では4.3%、女子は6.5%という結果であり、本研究結果と同様の結果であることがわかる。しかしながら、本研究結果は、「自分の意思で決めた」と回答した割合が低く、これは自ら進んでスポーツ活動を始めたという人が少ないことを表している。永谷(1999)は、スポーツ活動において、メンバーや自己が中心となって目標設定をすることが、活動意欲にプラスの影響を及ぼすということを指摘していることから、その後のスポーツ活動を意欲的に取り組んでいく上で、自分の意思で決めるということが、スポーツの継続にプラスの影響を及ぼすということが考えられる。

表6 スポーツを始めるきっかけ

単位：名

自分の意思で決めた	77 (44.7)
友達がやっていた	48 (27.9)
親に勧められた	30 (17.4)
その他	17 (9.8)

注) ( )内は比率(%)を表す。

## 6. スポーツ継続の有無とその理由について

表7は、スポーツの継続の有無を示している。その結果、今でもスポーツを継続している人は、全体の51.1%で、途中でやめてしまった人は、48.8%と高い割合を示した。

清水(2017)のスポーツ活動の継続状況の調査では、高校進学時において、スポーツ活動を継続している人が全体の7割を占め、3割の人がスポーツ活動から離脱しているという結果であった。さらに、大学進学時においては、部活動からサークル活動に変更はあるものの、半数以上のものが種目を変えることなく、継続してスポーツ活動を行っていると報告している。この結果から、本研究結果は清水(2017)の結果よりもスポーツ継続状況が悪い状況である。これはつまり、生涯にわたってスポーツを実施する人の減少を意味するものであるため、高等学校から大学への移行期に、いかにスポーツ実施者を減らさないようにすることができるかが、今後の重要な課題であるといえるだろう。

表7 スポーツ継続の有無

単位：名

今でも続けている	88 (51.1)
途中でやめてしまった	84 (48.8)

注) ( )内は比率(%)を表す。

## 7. スポーツ活動を継続している理由

表8は、スポーツ活動を継続している理由について示している。結果は、「そのスポーツをすることが楽しいから」が最も多く、全体の約60%を示し、続いて「その他」(14%)、「一緒に続けてきた仲間がいるから」(11.2%)、「勝負の世界が好きだから」(8.4%)となった。

スポーツ継続の理由については、清水(2017)が行ったスポーツ活動の「離脱」と「参加」に関する調査の中で、中・高生時におけるスポーツ活動理由について、「その運動・スポーツをすることが好き」が、中学生では65.8%、高校生では54.1%最もと高い割合を示し、続いて「友達と取り組むのが楽しい」「体を動かすことが好き」が上位を占めていた。この結果は、今回の調査結果とほぼ同様の結果であり、スポーツを継続する上で最も重要な要因は、「スポーツをすることが好き・楽しい」と感じることであり、その活動自体に魅力を感じて、スポーツに取り組む姿勢、つまり内発的動機



づけを高めることが重要であると考えられる。また、「仲間の存在」という要因も高い割合を示しており、スポーツをする上でチームメイトの存在は非常に重要な要因であるということが推測できる。つまり、他者との関わりの中で活動することに意義を持つということも、スポーツの継続には、重要な要因であると考えられる。

表8 スポーツ活動継続の理由

単位：名

そのスポーツをすること自体が楽しいから	64 (59.8)
その他	15 (14.0)
一緒に続けてきた仲間がいるから	12 (11.2)
勝負の世界が好きだから	9 (8.4)
そのスポーツを通して尊敬する恩師ができたから	7 (6.5)

注) ( )内は比率(%)を表す。

## 8. スポーツ活動から離脱した理由

表9は、スポーツ活動から離脱した理由について示している。結果は、「その他」が最も多く(46%)、続いて「練習がしんどかったから」(18.2%)、「そのスポーツに魅力を感じなくなったから」(16.5%)、となった。

清水(2017)のスポーツ活動をしていて感じるマイナスの要因に関する調査では、「練習内容が苦痛であるとき」(45.6%)が最も多く、続いて「人間関係がうまくいかないとき」(42.5%)、「試合に負けたり、思うような結果が出なかったとき」(30.0%)であり、「顧問からの厳しい指導」も上位にあると報告している。今回の研究結果と比較する、練習に関する要因が上位を占める点については同様であるが、それ以外の要因を見ると少し違いが見られた。本研究結果では、「その他」が最も高い割合を示しており、その理由としては今回の調査対象者が大学生であるということが一つ考えられる。清水(2017)の調査において、大学進学時においてスポーツ活動から離脱した動機について調査したものがあり、その中で最も多かった回答は、「学業に専念するため」(37.0%)であり、続いて「他に興味のある運動系以外の部活があったから」(31.5%)、「高校の練習内容が厳しい」(20.4%)であった。この結果から、「その他」を選んだ人の理由としては、「学業とスポーツとの両立の難しさ」や「新しいことへの挑戦」などが理由として考えられる。

さらに「その他」の理由として考えられる原因が「バーンアウト」である。スポーツ

## 大学生のスポーツ活動の「継続」と「離脱」に関する考察(勝)

選手のバーンアウトが問題視される背景として、岸・中込(1989)は、スポーツ選手のバーンアウトが「単に成績の低下やスポーツからの離脱といった問題に終わるものではなく、対人関係や学生競技者の就学上の問題、精神衛生といった日常生活の様々な領域に波及する」と指摘している。つまり、スポーツから離脱する原因は、様々な要因が複雑に絡み合っていることが考えられる。そして、今後スポーツから離脱する人を減らすためには、スポーツ指導者の関わりが重要となってくるだろう。スポーツを通じてすべての人々が幸福で豊かな生活を営むことができる社会の形成や、若者のスポーツ参加の拡充などを具現化させるためには、運動やスポーツ活動の楽しさや意義、重要性を認識し、スポーツ活動をする者が楽しみや喜びを感じられるような環境整備や企画とその実現が不可欠であると考えられる。

表9 スポーツ活動離脱の理由

単位：名

その他	46 (40.0)
練習がしんどかったから	21 (18.2)
そのスポーツに魅力を感じなくなったから	19 (16.5)
練習してもうまくならないから	12 (10.4)
試合で負けることが嫌だから	6 (5.2)
指導者が厳しかったから	5 (4.3)
チームメイトとの人間関係が悪くなったから	4 (3.4)
指導者との人間関係が悪くなったから	2 (1.7)

注) ( )内は比率(%)を表す。

### 【まとめ】

本研究では、大学生のこれまでのスポーツ経験、スポーツ活動に対する動機、スポーツ継続状況を明らかにし、スポーツを継続する上で重要な要因について検討を行った。その結果をまとめると以下ようになる。

これまでのスポーツ経験について、幼少期(小学生)の頃は、約60%の人が外でよく遊んでおり、遊び場やスポーツ施設も身近にあったという結果となった。また、幼少期から高校までのスポーツ実施率は、小学校高学年と中学校が最も高い割合を示した。年代によって取り組むスポーツ種目に若干の違いはあるものの、全般的に球技系種目の実施率が高いということが明らかとなった。

スポーツ活動に対する動機について、スポーツを始めるきっかけは、「自分の意思で決めた」と回答した人が最も多く、スポーツを継続する要因の一つとして、親や友人等、周囲からの誘いでスポーツを始めるよりも、自分の意思で決めてスポーツを始めるといことが重要であると考えられる。

スポーツの継続状況について、スポーツを継続している人は、51.1%であり、途中でやめてしまった人は48.8%であった。スポーツを継続している理由については、「そのスポーツをすること自体が楽しい」と回答した人が最も多く、内発的に動機づけられてスポーツ活動に取り組むことが、スポーツを継続する上で重要な要因であると考えられる。また、「一緒に続けてきた仲間がいるから」と回答した人も3番目に多い割合を示し、仲間の存在というのも重要な要因の一つであるということが明らかとなった。

スポーツ活動から離脱した理由について、「その他」が最も高い割合(46%)を示した。「その他」と回答した人が最も多かった理由としては、今回の調査対象者が大学生であったということが推測される。大学の時期というのは、専門的知識の習得と卒業後のライフステージに大きな影響を与える時期であり、スポーツ活動の継続を制御するという、いわゆる「学業とスポーツの両立の難しさ」が要因として考えられる。また競技志向型のスポーツ活動を行っていた人は、自己の競技成績の向上に限界を感じたり、高校まででやりきったと感じたりする機会が多々見受けられる。その結果、大学進学時においてスポーツ活動を離脱する要因として、「バーンアウト」や、「新しいことへの挑戦」などが考えられる。以上のことから、「その他」に含まれるスポーツ活動からの離脱の理由は、「学業とスポーツの両立の難しさ」、「バーンアウト」、「新しいことへの挑戦」などが要因として考えられるのではないだろうか。

これらの要因の中でも特にスポーツ活動からの離脱について、重要視すべき要因は、「バーンアウト」である。バーンアウトとは、燃え尽き症候群とも呼ばれ、長い間の目標への献身の末に、その目標を達成できなかった場合に起こることが多いと考えられており、伊藤ら(2016)は、「運動・スポーツからの離脱の背景には、中学・高校時代におけるネガティブなスポーツ経験を経験したことによるバーンアウトが存在している」と述べている。このことから、スポーツの離脱を防ぐためには、バーンアウトによってスポーツから離れていく人を減らすことが重要であると考えられる。そのため

には、特にスポーツ指導者の存在が重要で、上野(1998)は、運動部活動における指導者の関わりは、生徒がスポーツ活動を行う上で大きな影響を及ぼすと指摘している。つまり、指導者の関わり方次第で、その人のその後のスポーツ活動の継続か離脱かを左右する可能性を秘めていることが推測される。

最後に、今回の調査を通して、スポーツ活動の「継続」と「離脱」を考える上で、指導者との関わりは切っても切り離せない問題であるということが考えられる。スポーツ指導者の行動や態度が、スポーツ活動を行っている人に影響を与えるという先行研究は数多くされている。例えば、指導者のポジティブな行動は、スポーツ活動での生徒のポジティブな態度・情動経験と関係するという報告など、指導者の行動によって、生徒にポジティブ影響をもたらしたり、ネガティブな影響をもたらしたりすると指摘している。そこで、今後の研究としては、指導者の関わり方という視点から、スポーツ活動の「継続」と「離脱」について調査をすることが重要であると考え。具体的には、どのような指導者の下で指導を受けた選手が、スポーツ継続にプラスの影響を及ぼすのか、またスポーツ離脱にマイナスの影響を及ぼすのかを明らかにすることが必要である。さらに、スポーツ活動を「継続」している人、スポーツ活動から「離脱」した人に対して、その原因についてインタビュー調査などの質的調査を行うことも必要であると考え。それによって、スポーツ活動における「継続」と「離脱」の要因がさらに明らかになるであろう。

### 【参考文献】

- ・伊藤 豊彦・織奥 信男 「体育学習における自動・生徒の楽しさを規定する要因と教師の認識」『体育学研究』 1988 pp.123-133
- ・岸 順治・中込 二郎 「運動選手のバーンアウト症候群に関する概念規定への試み」『体育学研究』 34 1989 pp.235-243
- ・松井 匡治「運動部活動に関する実態調査」『仙台大学紀要』 24 1993 pp.127-153
- ・上野 耕平・中込 「運動部活動への参加によるライフスキルの獲得に関する研究」『体育学研究』 43 1998 pp.33-42
- ・永谷 稔 「スポーツ集団の意思決定者認識が活動意欲に及ぼす影響について」『北海道女子大学短期大学研究紀要』 36 1999 pp. 161-173
- ・小島 理永・松本 学・渡辺 貫二 「短大生における運動・スポーツの成育歴に関する実態調査」『国際学院埼玉短期大学研究紀要』 25 2004 pp. 35-47

- ・藤原 誠・堺 賢治 「大学生のスポーツ活動に関する研究：高等学校におけるスポーツ経験との関係」『愛媛大学教育学部保健体育紀要』 7 2010 pp. 21-30
- ・文部科学省 内閣府「体力・スポーツに関する世論調査」pp.15 2012
- ・SSF 笹川スポーツ財団 「10代のスポーツライフに関する調査」pp.96 2015
- ・スポーツ庁 第2期スポーツ基本計画「参考資料」pp.45 2017
- ・平成29年度（公財）全国高等学校体育連盟 加盟・登録状況【全日制＋定時制】  
([http://www.zen-koutairen.com/f\\_regist.html](http://www.zen-koutairen.com/f_regist.html))
- ・平成29年度日本中学校体育連盟「加盟校調査集計」  
([http://njpa.sakura.ne.jp/pdf/kamei/h29kameiseito\\_m.pdf](http://njpa.sakura.ne.jp/pdf/kamei/h29kameiseito_m.pdf))
- ・清水 紀人 「学校教育下におけるスポーツ活動の「離脱」と「参加」についての検証」 118 2017 99-107
- ・中原 雄一・池田 孝博 「全国調査との比較にみる本学学生のスポーツ経験と意識に関して」『福岡県立大学人間社会学部紀要』 26 2018 pp.221-229
- ・全国大学体育連合「大学生のスポーツ経験と意識に関する調査」  
(<http://daitairen.or.jp/>)

